

でんでら通信 第百二十号 令和六年五月

坐禅会

五月二十七日（月）十時に坐禅会を開催します。
みなさんのご参加をお待ちしております。

舞鶴引揚記念館と河野宗寛老師

先日、京都府舞鶴市にあります舞鶴引揚記念館へ行ってまいりました。皆さんは第二次世界大戦後の引き揚げについてご存じでしょうか。

ここには、大戦後の引揚者、復員者をいかに日本本土に迎え入れたかが記されています。

《舞鶴引揚記念館の概要》（記念館説明より）

昭和二〇年（一九四五年）第二次世界大戦が終結し、旧満洲（現 中国東北部）や朝鮮半島をはじめ南太平洋など多くの国や地域に約六六〇万人もの日本人が残されました。これらの方々を速やかに日本へ帰国させなければならなくなり、“引き揚げ”が開始されました。呉をはじめ順次18の引揚港が全国につきつぎと設置され、舞鶴もその役割を担うこととなり、主に旧満洲や朝鮮半島、シベリアからの引揚者・復員兵を迎え入れる港となりました。

舞鶴では昭和二十年（一九四五年）十月七日に最初の引揚船「雲仙丸」が入港してから昭和三十三年九月七日の最終引揚船「白山丸」の入港まで国内で唯一十三年間にわたり約六十六万人もの引揚者・復員兵を

迎え入れました。

舞鶴引揚記念館は、昭和六十三年（一九八八年）四月に舞鶴市民や引き揚げて来られた方々をはじめ、全国の皆様の「ご支援」「ご協力」によって開館し、再び繰り返してはならない“引き揚げ”の史実を未来に伝える「平和の尊さ、平和への祈り」のメッセージを発信しております。

当館には、シベリアの地で使用したコートなどの防寒着をはじめ「引揚証明書」などの文書類など全国から約一万六千点の貴重な資料の寄贈を受け、常設展示にて千点を超える展示をおこなっております。

平成二十七年「二〇一五」十月十日に収蔵資料のうち五七〇点がユネスコ世界記憶遺産に登録されました。

満蒙開拓として日本から渡った人、日本兵として渡っていた人、あるいはシベリア抑留者として引き揚げてきた人などについて、敗戦の中での引揚という悲惨な惨状の様子、展示品が、心を打ちます。為政者により始まる戦争という愚かな行為は、戦争終結後も長年にわたり国民を苦しめます、本当に愚かなことです。

このような引揚者の中に、のちに管長となられた河野宗寛（このそうかん）老師がみえます。戦前、本山妙心寺は、満洲に渡った日本人への布教活動拠点として、満洲国新京（現・長春）妙心寺別院に布教総監として赴任しました。

やがて終戦を満洲の地で迎えられ、大変な混乱に巻き込まれてしまいました。当時一人だけでも帰国するのは至難であったのですが、老師は慈悲深い方でありました。終戦の混乱の中、老師の眼に映って

きたのは、町にあふれる孤児たちの姿でありました。厳寒の満洲では、「三日ぐらい食べなくてもよいが、冬に暖房がなければ一晩で凍え死ぬ」と言われたそうです。

老師は、いち早く坐禅堂を孤児院に開放し、自ら私財をなげうって石炭を買い集め、町にあふれる孤児たちをかかまう「慈眼堂」を開きました。

「戦に敗れし日より憂きことは親のなき子らのさまよひあるく」と当時の思いを詠われました。

それまでは禅によってひたすら精神の鍛練を説かれた老師が、一転して多くの孤児たちの親となられました。やがて、ソ連兵や中国共産党軍が入ってくるといふ戦乱の中、老師は、我が身を捨てる決意で、日本へ引き揚げる決断をし、約三百名の孤児を連れて昭和二十一年七月に引揚を開始し約一か月かけて佐世保港に引揚げられました。

その時の様子を詩にして詠われています。「幼子に今日はみ国に帰るよと涙もろとも説き聞かせけり」

その後、愛媛県大乗寺へ帰られ、後にその体験から社会福祉に尽力されました。

昭和二十五年愛知県一宮市妙興寺に住職として就任され、同寺僧堂師家とされました。

昭和二十六年、静岡県、方廣寺派管長に就任されました。69才遷化（せんげ）、僧侶が亡くなること心中、余りあるご苦勞があったことと思われま

河野宗寛（1901～1970）

諱は宗寛、室号は大淵窟。大分県大分市に生まれる。